かいぎん

エコマガ

ECONOMIC DATA & MANAGEMENT MAGAZINE

vol.247 OCTOBER 2025

10

The Voice
金属建具・建築金物の品質磨き
社員の幸せを実現
有限会社 海邦ベンダー工業

KRI アウトルック
沖縄の家計像

地産地商
沖縄そばの可能性を広げる
老舗製麺所
株式会社伊佐製麺所

津口
世代を超えたチームづくり



渡嘉敷島の月夜

OKINAWA KAIHO 海邦銀行



朝比奈寛幸税理士事務所、代表税理士、
シナリオ・プランナー、農業経営アドバイザー
朝比奈 寛幸

未来を創造する思考

現在、生成AIの存在感が増しています。ときに「人間はAIに仕事を奪われてしまうから、人間にしかできないことをしなければ」といった何とも言えない恐れの思考になる機会も多いのではないでしょうか。今回はこういった「思考」において、私たちが本質的に大切にすべきことについて考えてみたいと思います。



ビジネスにおける問題解決や意思決定の代表的な思考のフレームワークに「雲雨傘」理論というものがあります。ご存知の方も多いかと思いますが、「雲雨傘」とは次のような思考の流れを表現したものです。

雲：空に黒い雲がある「事実や状況」
雨：雨が降りそう⇒事実に基づいた「解釈」
傘：傘を持っていこう⇒解釈に基づいた「判断と対応」

企業のロジカルシンキング研修などでよく利用されるもので、「事実」と「解釈」を分けて理解し、より相応しい「判断と対応」につなげていくことを意図した思考方法といえます。難しいことはなく、当然のことのように感じますが、日常生活の中で私たちは本当にこのような思考の流れを作り、行動できているでしょうか。

私の事例

一つ、私自身の例をお話しします。先日、私の会社のメンバーから「関与先から受けたXという質問に関して悩んでいる」という話をフラっと受けたときのことです。私はそのメンバーの性格や仕事の進め方などから、以下のような思考を巡らせました。

雲＋雨：メンバーがXについて知識が足りず困っている
傘：Xについてゼロから説明や解説をメンバーに行う

皆さんはこれを見てどう思われましたか。私の内省では、雲（事実）と雨（解釈）を混同し、誤った解釈に基づいて傘に移った（対応した）という認識です。「困っている」理由を「知識の不足」と瞬時に決めつけてしまったのです。しかし、内実はメンバーが「関与先への回答をどのような手段で行うべきか」を悩んでいたということでした。そのメンバーへの私の解説が不必要なものになったことは言うまでもありません…。

「事実」と「解釈」の混同

さて、私の失敗事例を通じて気付いていただきたいこと、それは、日々の生活において、このように「雲と雨とを区分しない」、つまり「事実と解釈とを区分しない」で判断と行動を起こしてはいないかということです。

解釈とは、事実を見て「だから何なのか」を示すことです。雲は雨をもたらすものなのか、その形や風向きなどその他の事実要素はどうか。それらから導き出す解釈は、事実とはしっかり分離して考えないといけないはずです。

税理士と生成AI

そろそろリード文で触れた生成AIの話に戻りましょう。生成AIの活用については、筆者が属する税理士の業界も他人事ではなく、その本格的な到来によって大きく事業環境が変わってきています。さて、この「生成AIの本格的活用」を雲（事実）と捉えた場合、私たちはどのように思考して、判断し対応していくべきなのでしょうか。

事実と解釈の区分を不明確にしたままでは、おそらく「生成AIによって、税理士の仕事は自動化され、仕事が奪われる」という半ば恐怖心に支配された解釈を示すことになり、結果「生成AIにはできない仕事を増やそう」といった抽象的な対応となるでしょう。

しかしながら、生成AIの到来という雲（事実）を見た上で「今どのように活用され、今後どのように活用され得るのか」と事実をさらに観察してみる。そして、その事実や可能性を自分や自社の在り方にあてはめながら「だから何なのか、何が起こり得るのか」と雨（解釈）を考え直してみる。そうした不断の取り組みが、より具体的な傘（対応）を見つける上で大事なことだと感じます。

あなたの「傘」を見つけ直す

読者の皆さまにおかれましても、ご自身や会社の「雲と雨」を見つめ直し、それらを明確に区分することを通して、新たな、そしてより具体的な「傘」を見つけてみてはいかがでしょうか。